

史跡賀茂御祖神社境内

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡賀茂御祖神社境内

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第12冊目として、このたび整備事業に伴います史跡賀茂御祖神社境内の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

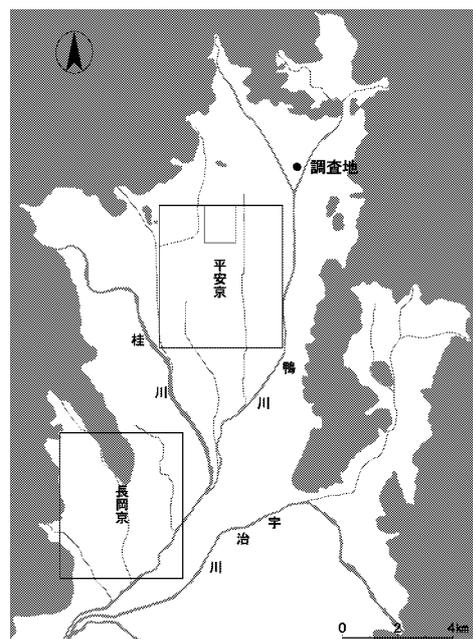
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

平成15年2月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡賀茂御祖神社境内
- 2 調査地点所在地 京都市左京区下鴨泉川町59
- 3 委託者及び承諾者 宗教学法人 賀茂御祖神社 代表役員 鳥居清三郎
- 4 調査期間 齋院御所 : 1998年11月24日～1998年12月16日
奈良の小川1次調査 : 2001年1月22日～2001年3月12日
奈良の小川2次調査 : 2002年1月21日～2002年3月4日
- 5 調査面積 齋院御所 : 67m²
奈良の小川1次調査 : 237m²
奈良の小川2次調査 : 239.85m²
- 6 調査担当職員 齋院御所 : 櫻井みどり
奈良の小川1次調査 : 津々池惣一
奈良の小川2次調査 : 櫻井みどり
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「相国寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用方位・座標値 使用測地系 日本測地系(改正前) 平面直角座標系 (ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度(座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した)
- 10 遺物番号 調査ごとに、挿図の土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品の順に通し番号を付した。
- 11 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 12 作成担当職員 櫻井みどり : . . .
津々池惣一 :



(調査地点図)

目 次

はじめに	1
1. 歴 史	1
2. 地 理	2
3. 周辺の調査	2
齋院御所	5
1. 調査経過	5
2. 遺 構	5
3. 遺 物	7
4. 小 結	8
奈良の小川 1 次調査	9
1. 調査経過	9
2. 遺 構	9
3. 遺 物	12
(1) 土器類	12
(2) 瓦 類	14
4. 小 結	14
奈良の小川 2 次調査	16
1. 調査経過	16
2. 遺 構	16
3. 遺 物	18
(1) 土器類	18
(2) 瓦 類	19
(3) その他の遺物	20
4. 小 結	20
ま と め	22

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	斎院御所	1	トレンチ全景（北から）
		2	斎院御所	2	トレンチ全景（西から）
		3	斎院御所		石敷（北から）
		4	斎院御所		石列（北から）
図版 2	遺構	1	奈良の小川 1 次調査		全景（東から）
		2	奈良の小川 1 次調査		石組遺構（南から）
図版 3	遺構	1	奈良の小川 1 次調査		流路 2（北東から）
		2	奈良の小川 1 次調査		集石遺構（北から）
		3	奈良の小川 1 次調査		集石遺構（北から）
図版 4	遺構	1	奈良の小川 2 次調査		全景（東から）
		2	奈良の小川 2 次調査		石敷遺構（南から）
		3	奈良の小川 2 次調査		小川断ち割り断面（東から）
		4	奈良の小川 2 次調査		拡張区と現泉川（西から）
図版 5	遺物	1	奈良の小川 2 次調査		軒瓦
		2	奈良の小川 2 次調査		その他の遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：50,000）	2
図 2	古絵図（鴨社古図）	3
図 3	後鳥羽院鴨社参籠御所（賀茂斎院御所絵図）	3
図 4	調査区位置図（1：2,500）	4
図 5	調査前全景	5
図 6	調査風景	5
図 7	遺構実測図（1：100）	6
図 8	土器実測図（1：4）	7
図 9	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	7
図 10	調査前全景	9
図 11	調査風景	9
図 12	遺構実測図（1：200）	10
図 13	石垣遺構周辺実測図（1：100）	11

図14	流路2出土土器実測図(1:4)	13
図15	流路1出土土器実測図(1:4)	13
図16	軒瓦拓影・実測図(1:4)	13
図17	調査前全景	16
図18	小川断面剥ぎ取り作業風景	16
図19	石敷遺構東側断ち割り断面図(1:50)	17
図20	小川断面図(1:50)	17
図21	遺構実測図(1:200)	18
図22	土器実測図(1:4)	19
図23	軒瓦拓影・実測図(1:4)	19
図24	その他の遺物実測図(1:2)	19
図25	下賀茂境内之絵図(寛文古図)	22
図26	奈良の小川調査区全体図(1:300)	23
図27	御蔭祭行列絵巻	24
図28	御生神事行粧絵巻	24

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	出土土器計測表	7
表3	遺物概要表	8
表4	遺構概要表	12
表5	遺物概要表	14
表6	遺構概要表	17
表7	遺物概要表	20

はじめに

1. 歴史

賀茂御祖神社（下鴨神社）は、賀茂建角身命・玉依媛命を祭神として祀る長い歴史をもつ神社である。

賀茂建角身命は『山城国風土記』によると、「神武東征」の際難路を先導した八咫烏の化身とされる。大和の葛木山から南山城を経て賀茂川の合流点に達し、さらに北上し現在の上賀茂神社のあたりに落ち着いた。

賀茂建角身命は丹波の伊可古夜日女との間に玉依日売・玉依日子をもうけた。また、玉依日売は丹塗矢との神婚によって賀茂別雷神を産んだとされる。この賀茂別雷神が上賀茂神社（賀茂別雷神社）の祭神とされた。これに対して、母親である玉依日売を祀った下鴨神社を、賀茂御祖神社と称する。これらの神社は、賀茂県主一族によって祀られた。

神社の存在は、『続日本後記』に見える天平勝宝2年（750）の記事に賀茂御祖神社に御戸代田1町を奉られたとの記事から確認できる。

賀茂御祖神社（下鴨神社）は元は、土着の豪族（八咫烏の伝承を持つ）賀茂県主が歴代禰宜を勤める賀茂別雷神社の摂社の一つであった。しかし天平神護元年（765）以前に、摂社の三井社に仕える下級神職の白髪部氏（出雲郷辺りに住んでいた賀茂県主とは血統を異にする）に「鴨禰宜白髪部」の氏姓が与えられ、上社からの分立が朝廷によって認められた。その後、宝龜11年（780）には、下社の祠官である鴨禰宜真髪部（白髪部氏）に賀茂県主の賜姓が行われた。翌年には賀茂上下両社禰宜・祝等に把笏が許可され、上・下社は、対等の待遇を受けることとなる。

その後も、延暦3年（784）には従二位の神階を授かり、延暦13年（794）には正二位勲一等に叙せられた。平安遷都とともに賀茂社は、地方豪族の氏神から王城鎮護の神として祀られることとなり、大同元年（806）には賀茂祭が勅祭となり、弘仁元年（810）には初めて齋王が置かれた。

賀茂社に齋王が置かれた経緯については史料が残されていないが、嵯峨天皇が薬子の變の時に賀茂の神に祈願したのが始まりとする説が伝えられている。齋王に卜定されると、禊を行い初齋院（大内裏内の既設の殿舎）に1年間、その後、また禊を行った後野宮（京外の清浄な地に新たに造った殿舎）で1年過ごし3年齋と呼ばれる最も格式の高い禊を行い齋院（賀茂の齋院は、紫野に造られた）に入り日常生活を送ることになる。齋王は、賀茂祭の時に上・下賀茂社に参り齋院御所に入る。

初代齋王には、嵯峨天皇の皇女有智子内親王が卜定された。以後賀茂の齋院は、400年間の間に35人の齋王が卜定され、建暦2年（1212）後鳥羽上皇の皇女礼子内親王が病気のため退下して幕を閉じた。承久の乱（1221）以後、齋王は卜定されることはなく廃止された。

元永2年（1119）に下社が焼失した際に、賀茂の齋院御所内の廳屋・湯屋・着到殿・御器御

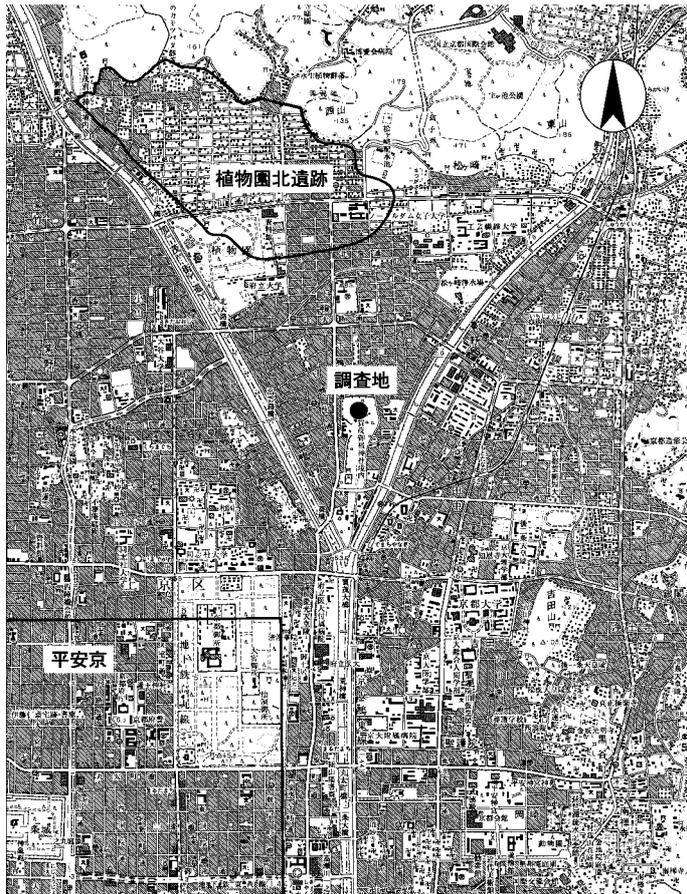


図1 調査位置図(1:50,000)

賀茂御祖神社の所在する北白川扇状地は、白川などの河川によって侵食された花崗岩が大量の砂礫となって流され、形成された最も規模の大きい扇状地とされている。この扇状地上には、植物園北遺跡や上賀茂遺跡などが存在する。

縄文時代の始まりと相前後して形成された北白川扇状地上では、狩猟・採集生活を送った人々の痕跡が確認できる。しかし、賀茂川と高野川の合流地点である三角洲では、まだ人が住めるような環境ではなかった。人々の生活の痕跡が現れるのは、弥生時代になってからである。

3. 周辺の調査

縄文時代後期の上賀茂遺跡や縄文時代から江戸時代までの遺跡を含む植物園北遺跡が、周辺の遺跡として挙げられる。

植物園北遺跡は、賀茂御祖神社の北西に位置し、京都府立植物園の北半を含む北側一帯に広がっている。東西約2km、南北約1.2kmの広大な面積を有する遺跡である。

植物園北遺跡では、縄文時代晩期の甕棺墓、弥生時代から古墳時代にかけては竪穴住居跡や土壇、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、中世の土壇や柱穴など多くの遺構を検出している。

倉・酒殿・侍所・贄殿・御巖殿等も消失した。

文明2年(1470)、応仁の乱により社殿および糺の森はことごとく焼失し、現在の社殿の大半は、寛永5年(1628)の造替遷宮の際に造営されたものである。本殿のみは、文久3年(1863)の造替遷宮のものである。

元禄7年(1694)には、賀茂祭が再興され、現在に至っている。

2. 地理

京都盆地は、約1万年前位まで湖底であったが、急速に陸地化が進んだ。湖が後退し、深泥池や巨椋池などが湖沼として残り、ほぼ現在と同じ地形ができあがった。

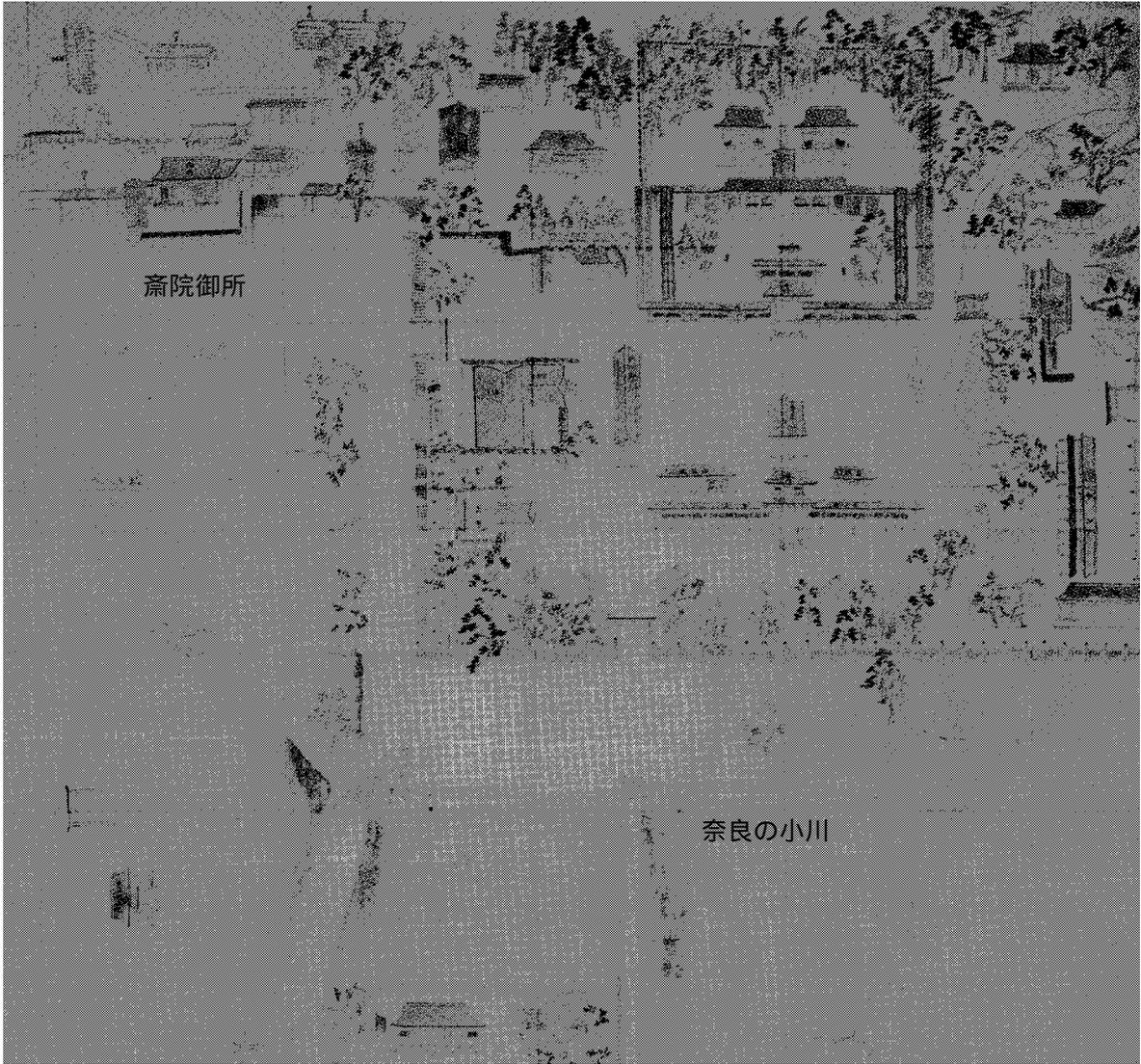


図2 古絵図（鴨社古図） 賀茂御祖神社蔵

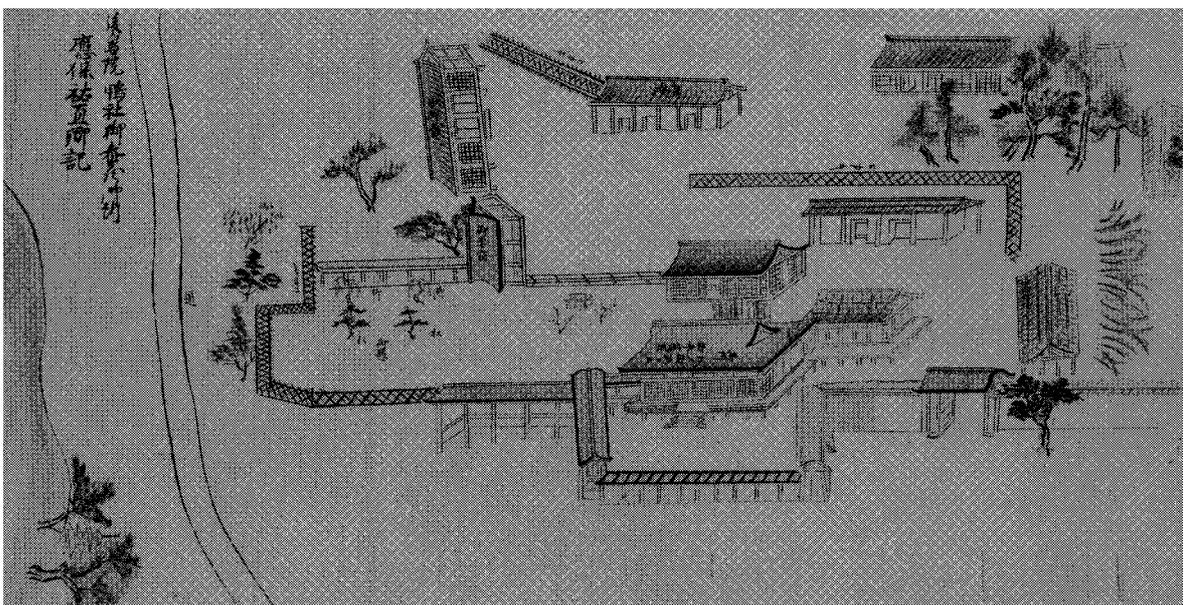


図3 後鳥羽院鴨社參籠御所（賀茂齋院御所繪図） 個人蔵

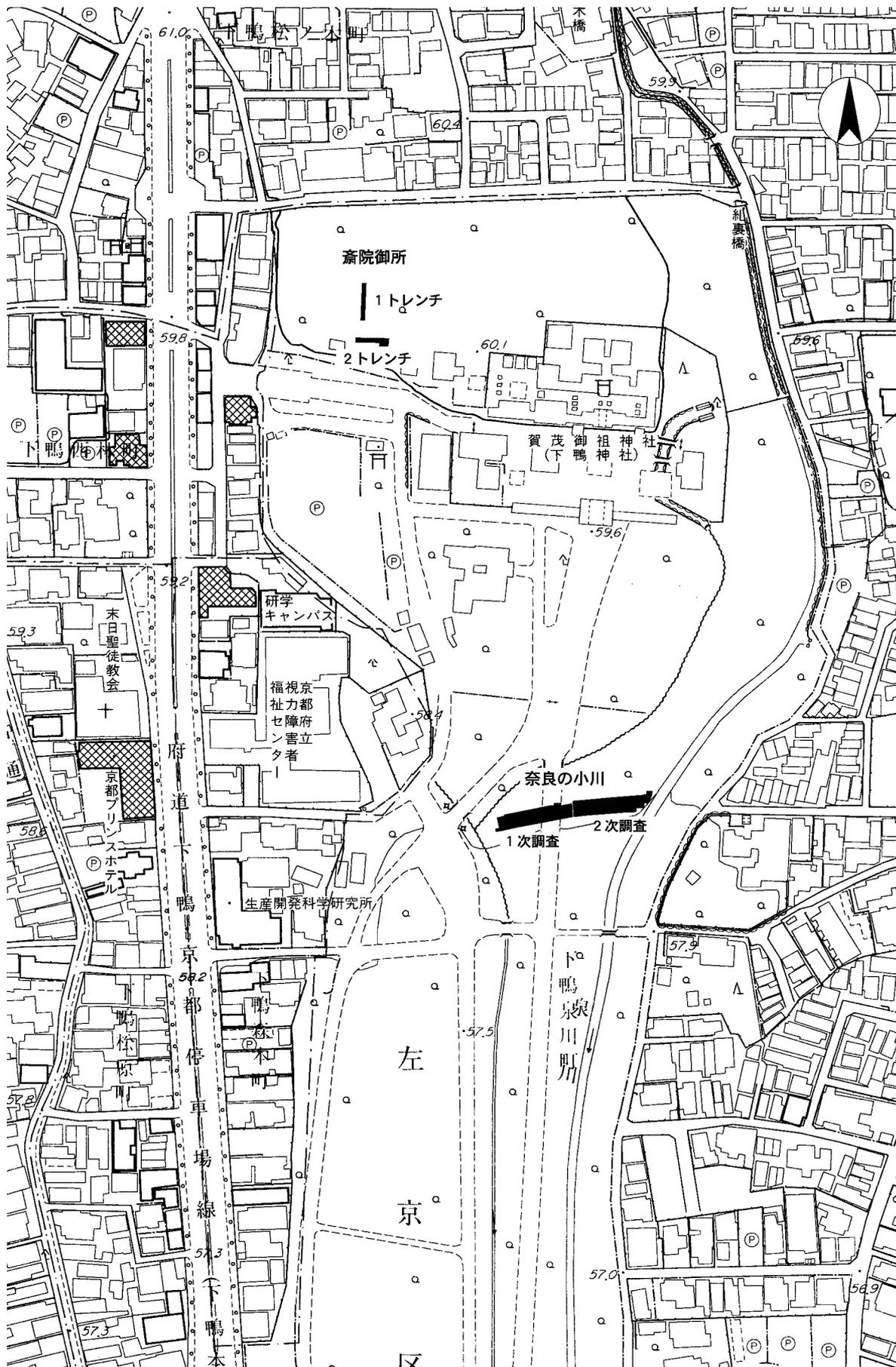


図4 調査区位置図(1:2,500)

齋院御所

1 . 調査経過

調査地は、京都市左京区下鴨泉川町に所在する賀茂御祖神社（下鴨神社）境内である。糺の森の一角に齋院御所が再建されることになり、その建設工事に先立って実施した試掘調査である。

齋院御所内には、弘仁元年（810）に齋院の制が施かれてから文明2年（1470）に焼失するまで、御所・北面屋・刀祢部屋・寶蔵・西御蔵・御車宿などの諸建物が存在していたことが、『鴨社古図』などによってわかっている。しかし、現在その所在した正確な場所は明らかでない。そこで今回の試掘調査は、齋院御所の建設予定地内に齋院御所ならびに、賀茂御祖神社に関する遺構の有無を確認することを目的として実施した。

調査に先立って1998年11月16日には、調査の無事を祈願する地鎮祭が関係者によって執り行われた。その後、11月24日から調査地内に繁茂する棕櫚の木や最小限度の樹木の伐採を行い調査区を確保し、トレンチを2箇所（1トレンチ：南北16m×東西2m、2トレンチ：東西13m×南北2m）L字に設定して調査を開始した。

1・2トレンチともに江戸時代から鎌倉時代の遺構を確認した。また2トレンチでは、断面観察によって鎌倉時代以前の遺構が存在することを確認した。

試掘調査期間中の1998年12月14日に、糺の森整備委員会に中間報告を行い承認をえて、12月16日にトレンチを埋め戻し、試掘調査を終了した。

2 . 遺 構

調査地の基本層序は、上から現代盛土（約50cm）、昭和40年代以前の表土（約10cm）、江戸時代の遺物包含層（約20cm）鎌倉時代から室町時代の遺物包含層（約20cm）となる。この層から下は、1トレンチでは自然の堆積層、2トレンチでは、一部、平安時代の遺物を含む遺構を確認した。



図5 調査前全景



図6 調査風景



図7 遺構実測図(1:100)

1 トレンチ

トレンチ中央部で鎌倉時代に比定できる石敷を南北5 m、東西2 mにわたって検出した。石敷に使用された石は、10～20cm前後の川原石で、

石敷北端はやや大振りの川原石を丁寧に東西方向へ一列に面を揃えて並べていた。それより南側の石は、雑然としていた。この石列は、トレンチ西から東に向かって少し北に振っている。

石列から北側は落ち込み、砂地になる。江戸時代の流路と考えられる。

2 トレンチ

トレンチ東側で検出した石列は、約20cm前後のやや細長い川原石を東西の面を揃えて南北方向に並べている。南端の3石は、長軸を東西方向に変えている。

拡張部南西隅で検出した土壌は、底部に炭の堆積が認められた。

拡張部分で行った断ち割り断面の観察によって、石列の続きと考えられる同種の石と、その下層で土壌状遺構を1基確認した。この土壌状遺構は、地山を掘り込んでいる。

表1 遺構概要表

時期	遺構
平安時代前期 ～鎌倉時代前期	土壌状遺構
鎌倉時代後期 ～江戸時代	石敷、石列、流路、土壌

3 . 遺 物

出土遺物は、整理箱にして1箱であった。

1・2トレンチとも鎌倉時代の遺構面直上までは、近世の瓦類の出土が多い。土器は、近世陶器と土師器が出土した。

土師器については5～8の土器が示す通り、器壁が厚く特異な様相を呈している。これは祭祀に使用された特殊なものであると考えられ、遺跡の性格をよく表していると言える。祭祀に使用する土器は、明治時代頃まで、木野の窯で焼かれていた。(新木宮司より御教示頂いた。)

1 トレンチ

石敷の北端の石列の直上で、寛永通寶が4枚出土した。土師器皿(1・2)は第2層から出土した。石敷直上では、直径約30cmの円形状に、鎌倉時代の土師器片(3)がまとめて出土した。

唐草文軒平瓦(13)は、平瓦凸面にヘラ記号がある。第1層から出土した。

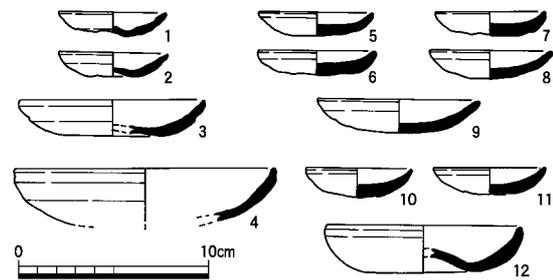


図8 土器実測図(1:4)

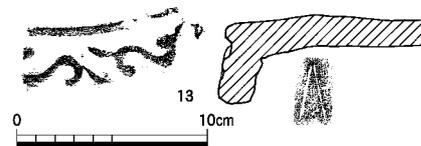


図9 軒平瓦拓影・実測図(1:4)

表2 土器計測表

番号	口径(cm)	器高(cm)	番号	口径(cm)	器高(cm)
1	5.7	1.4	7	5.8	1.3
2	5.6	1.3	8	6.3	1.5
3	9.8	2.0	9	8.6	1.8
4	13.8	3.0	10	5.5	1.5
5	6.1	1.3	11	5.9	1.4
6	6.2	1.3	12	10.0	2.5

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
鎌倉時代 ～室町時代	土師器・軒丸瓦・軒平瓦	1箱	土師器12点	1箱	0箱
江戸時代	土師器・陶磁器・軒丸瓦・軒平瓦・ 丸瓦・平瓦・銭貨・鉄製品		軒平瓦1点		
計		2箱	13点(1箱)	1箱	0箱

2 トレンチ

トレンチ西半部分から、陶磁器が多量に出土した。石列直上とその東側では、鎌倉時代の土師器片(4)がまとまって出土した。土師器皿(5~9)はトレンチ西第3層から出土した。石列直上では、寛永通寶が1枚出土した。江戸時代の土壌からは、近世瓦と土師器片(10~12)が出土した。

4 . 小 結

今回の調査は、遺構の有無を確認するための試掘調査であった。そのため遺構は検出できたが詳細は不明の部分が多く残ってしまった。調査により確認できた結果は、以下の通りである。

1 トレンチの鎌倉時代の石敷は、この地が高野川と賀茂川との三角洲地帯であるという土地の性格から、地盤強化のための地業であると考えられる。過去数回にわたって行われた試掘調査(京都府・京都市文化財保護課実施)においても、同種の遺構が報告されている。

2 トレンチの石列は、L字に曲がる可能性が考えられた。しかし、南壁断面で同種の石を検出したことから、南に続くものと考えられる。また、遺構の形状から建物に伴う雨落溝の一部である可能性が考えられる。

鎌倉時代の石列の下層で検出した土壌状遺構は、掘立柱建物の柱穴の可能性を考えることができる。しかし、遺物の採集ができなかったので、時代を確定することは困難であるが、層序から考えて鎌倉時代以前の遺構であると考えられる。

以上の調査結果から調査区内には、鎌倉時代から江戸時代に至る間の遺構が存在していることが確認できた。また、鎌倉時代以前の遺構が有る可能性も十分考えられるが、これらの遺構が『鴨社古図¹⁾』に見える建物に直接関係するものであるかどうかは、確認することができなかった。

註

- 1) 『鴨社古図』 この絵図は第8回建仁元年(1201)十二月十日式年遷宮のため元暦元年(1184)あるいは、建久7年(1196)に描かれたとみられる原図を鎌倉時代に書写したとされている。(『第1集賀茂御祖神社略史』1995年より)

奈良の小川 1 次調査

1 . 調査経過

本調査は、糺の森整備に伴う奈良の小川の発掘調査である。京都府教育委員会・京都市文化財保護課の試掘調査をもとに調査地を設定した。¹⁾ 参道を含む西側で瀬見の小川までを調査対象とし、調査地は現在の参道を横切る形で、東西35m、南北6～7m、調査面積は237m²であった。

調査は最初重機により奈良の小川検出面直上まで行い、後を手作業による調査掘削に移行した。2001年1月22日より開始して、3月2日に中間報告ならびに記者発表を行い、3月9日には現地説明会を行い調査を終了した。

2 . 遺 構

調査地は高野川と賀茂川が合流する出町柳の北方約1kmの賀茂御祖神社（下鴨神社）の境内にあたり、現在の奈良の小川の南約7mを東西方向にそった形の地点にあり、東側を南北に泉川が流れ、西側を瀬見の小川が南北に流れている。

現在の参道にあたる盛土下30cmには、近世以降何度かの参道を作り替えた痕跡が窺われる。その下に石組遺構があり、石組下には焼土壌が流路の南北肩部に張り付いている。その直下に地山がある。焼土壌と地山を切る形で奈良の小川（流路1）がある。

遺構は総計67基で、平安時代後期以前のもの、平安時代後期から鎌倉時代前期のもの、鎌倉時代から桃山時代のもの、江戸時代以降のものにわかれる。

流路2 この流路は調査地西端において検出した。その規模は、東西3.5m、南北7m以上である。深さは0.4mを測る。流路は12世紀後半代の土師器が投棄された状態で埋まっており、その後流路1が造られ、流路2の埋土層が流路1の肩部を形成している。したがって、この流路は平安時代後期以前のものである。流路2はその北側の流路1の北肩部である地山を幅2.5mにわたっ



図10 調査前全景（東から）



図11 調査風景（東から）

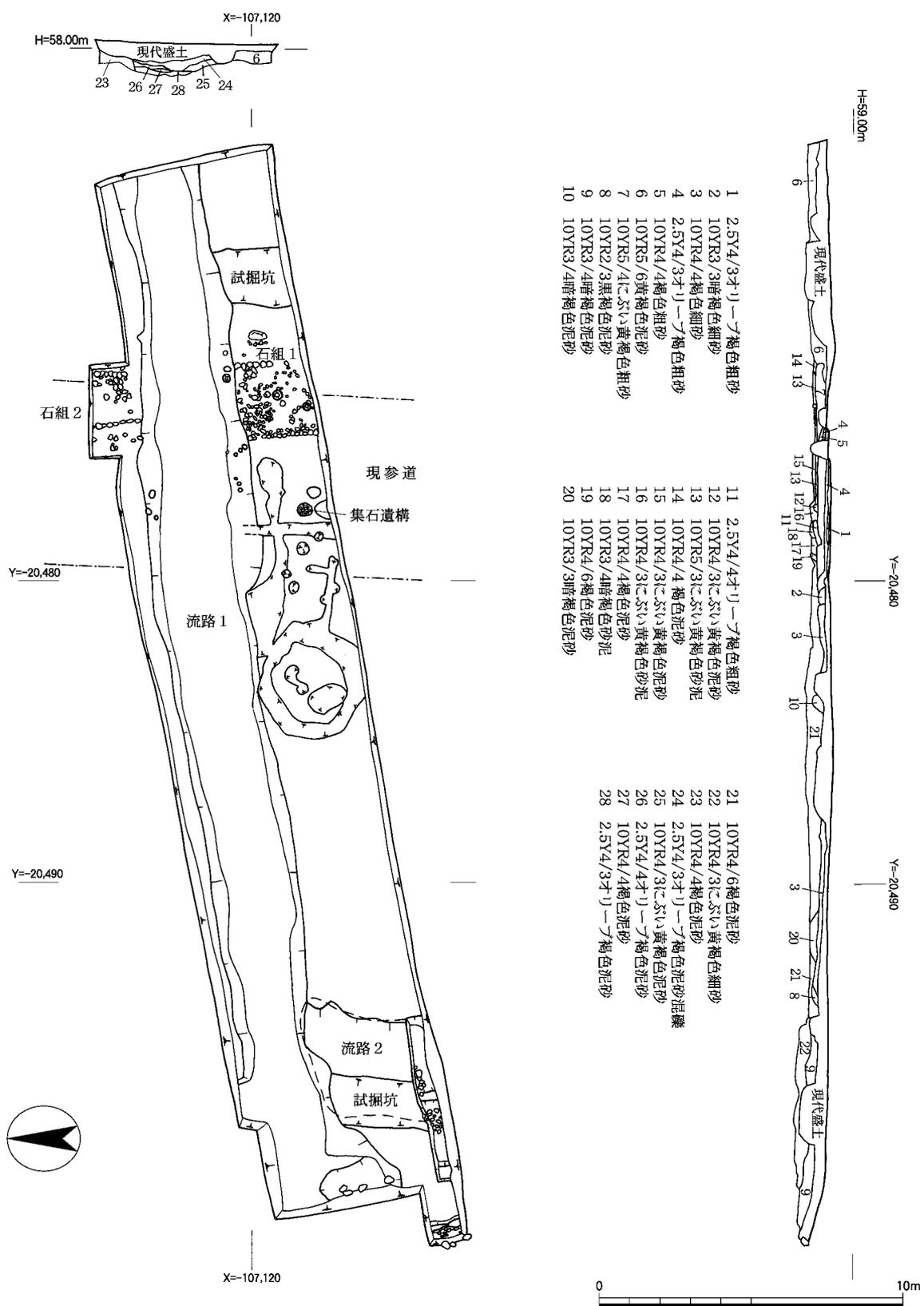


図12 遺構実測図 (1:200)

て穿っており北方から流れていたことが考えられる。ただし、流路1と同じく東方向からも流れていた可能性もありうる。

流路1 試掘段階で検出された小川である。調査地の東西に展開している。幅は3m前後で、東から西に流れている。高低差は0.2mでゆるやかな流れである。護岸の痕跡はない。この流路の下層からの出土遺物は極めて少ないが、平安時代後期の土師器が出土している。流路1中層では、平安時代後期から鎌倉時代前期のものが混じっているが、近世のものには安土桃山時代から江戸時代前期のものと17世紀中葉前後に収まる一群がある。この層は石組を切っている。

焼土壇2 流路1の南肩部で検出された。東西に0.8m、南北0.4mである。石組遺構の下に位置し、流路1の南肩部に張り付いたような状態で検出された。土師器片と共に炭が混入している。

焼土壇67 流路1の北側の肩部で検出されている。東西4.8mで、南北0.9m以上である。同じく石組遺構の下に張り付いたような状態で検出された。土師器片と共に炭も混入している。

両者は同じ性格の遺構と考えられる。石組遺構が造られる以前に流路1の肩部で何らかの祭祀行事を行っていたものと思われる。

石組遺構 現在の参道の下に流路1をはさんで南と北の2ヶ所に検出した。南の石組1は東西2.4m、南北2.0m以上ある。両端の石は列をなし、面を外側に合わせている。また、中央やや西に

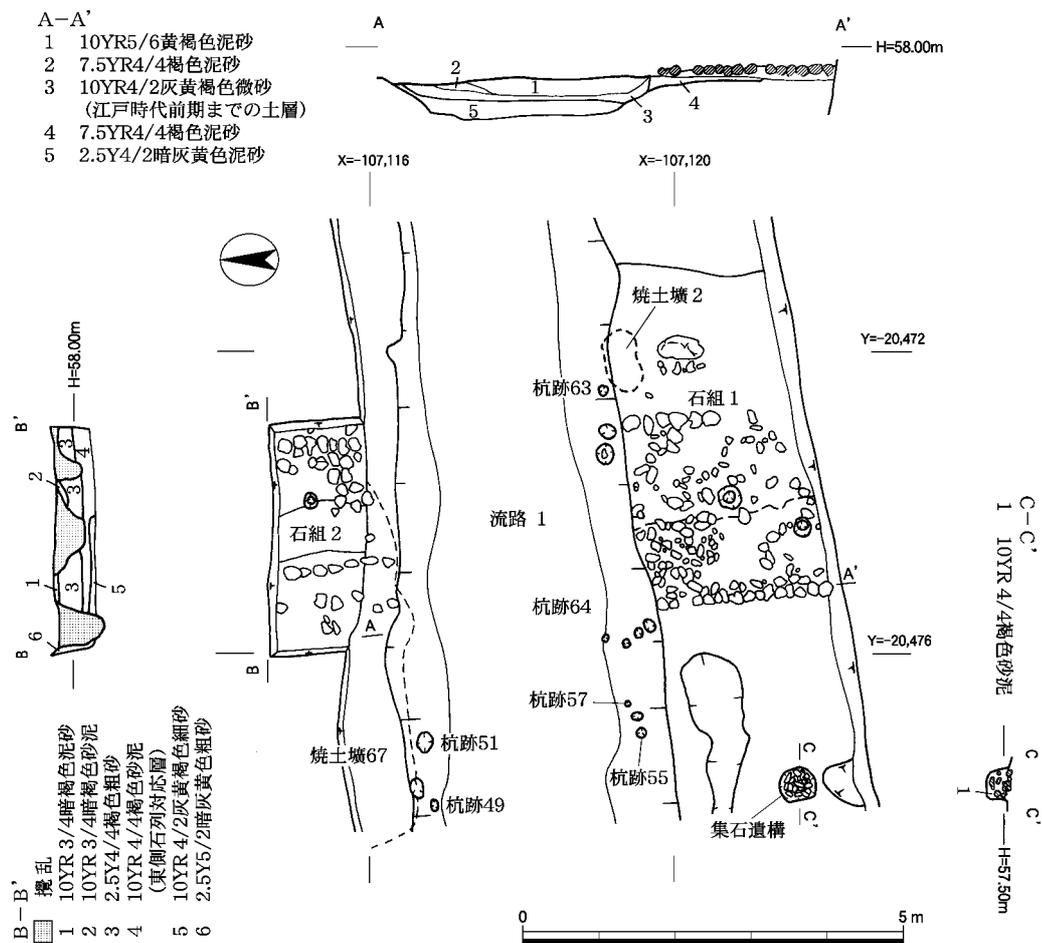


図13 石組遺構周辺実測図 (1 : 100)

表4 遺構概要表

時 期	遺 構
平安時代後期 ～鎌倉時代前期	流路1・2、焼土壙2・67、石組遺構、 杭跡遺構
鎌倉時代 ～桃山時代	流路1、集石遺構
江戸時代以降	流路1、柵列1・2

も東に面を合わせる石列がある。これは北側の西石列と同一線上に位置し、同じく石列より西に砂を敷き詰めている。東側のものは人頭大の石で、西側と中央やや西のそれは拳2個分大のものを使っている。断面からは東端の石列が新しい。また、北

側の石組2は東西1.8m、南北1.2m以上ある。両端の拳2個分大の石列はどちらも東側に面を合わせている。断面から西側の石列の方が古く、砂を敷き詰めて層を形成している。

杭跡遺構 石組1と2の間の流路1の底に近い肩部からは、流路にかけられていた可能性のある橋の橋脚の痕跡の可能性のある柱穴が複数ある。杭跡63・62・60・64・65・57・55・49は柱穴と考える。杭跡59・56・50・51は断定はできないが柱穴の可能性もある。

集石遺構 現在の参道の中央に近い所の下0.5mで拳大の川原石を集積した土壌を検出した。直径は0.5mの円形に近いもので深さは0.3mである。神社の教示によれば岐阜県の恵那や岡山県の玉野から石を取り寄せ穴に埋納する神事があるという。検出した石は川原石であったが土壌の立地から何らかの祭祀遺構と考えたい。

柵列1・2 現在の参道の東端に沿って杭跡が2条ある。東側のものは直径0.3mで柱当たりが残る。柱間は1.8mを測る。西側のものは直径0.2mで、柱間は1.5mを測る。石組み遺構を穿つてあることと現在の参道の東端に沿っているのでもちもごく新しいものである。

3 . 遺 物

出土した遺物は整理箱にして17箱である。流路1からのものがほとんどである。一括遺物は流路2、焼土壙2・67のものがある。出土遺物では平安時代後期のもの、江戸時代前期のものが比較的多い。

出土した土器で古いものは、古墳時代の須恵器椀・甕がある。流路1の中層および下層に混入していたものである。当該地もしくは上流域の古墳時代の遺跡の関連のものであろうか。

次に、平安時代後期の遺物は流路2の埋土が土器溜り状態になっており、そこから比較的多くの土師器が検出された。室町時代の遺物は少量である。江戸時代前期のものは、流路1の上・中層に多い。瓦では、巴文軒丸瓦が2点、軒平瓦1点も出土している。洛北産である。

(1) 土器類

平安時代後期から鎌倉時代前期の遺物には、流路2の埋土からまとめて出土した土師器がある(図14)。大きくは、器高2.2~3.3cm、口径12.5~15.8cmに収まるものと、器高1.1~1.7cm、口径8.4~10.2cmに収まるものとの2群に分けられる。いずれも、体部外面上半から口縁部外面にか

けて横方向のナデによる2段の凹みが見られるものである。口縁端部が立ち上がり、内傾し三角形状を示す。糸切りの底部を持つものもある。12世紀後半から13世紀前半代に収まる。

また、流路1下層からの遺物は、図15の18・19がある。大小の差異はあるものの、流路2の土師器と同様の傾向を示す。その他、石組1を検出中、流路1の南北の肩部で検出した焼土塊2・67からも少量であるが同時期の土師器片が出土しているが、小片である。

室町時代の遺物は、流路1中層の江戸時代前期までの層から出土している。極めて少ないが、瓦質の羽釜や鉢、天目茶碗などである。

江戸時代前期、17世紀前半の土器では土師器の他、唐津皿、瀬戸灰釉系椀、信楽播鉢などがある。流路1の主に中層から出ている。

図15の12～17は流路1の中層から出土したものである。12～15は土師器である。口径は10.0～11.2cmで、器高は2.1～2.4cmである。前期のものより厚みを増し、端部が丸みを帯びている。16は肥前染付である。高台は無釉である。17は唐津の小椀である。高台が付かないものである。17世紀の中葉に収まる。

また、17世紀中葉前後に収まる遺物がある。主に流路1上層から出土している。出土した土師

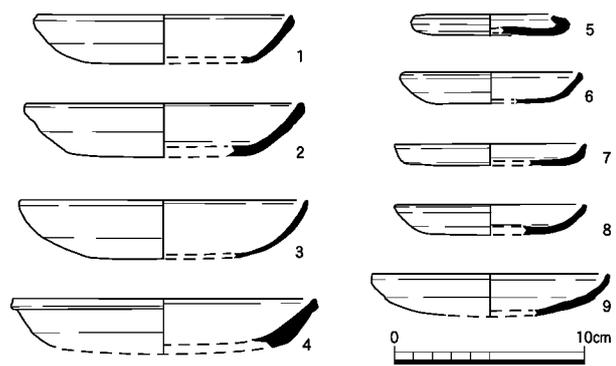


図14 流路2出土土器実測図(1:4)

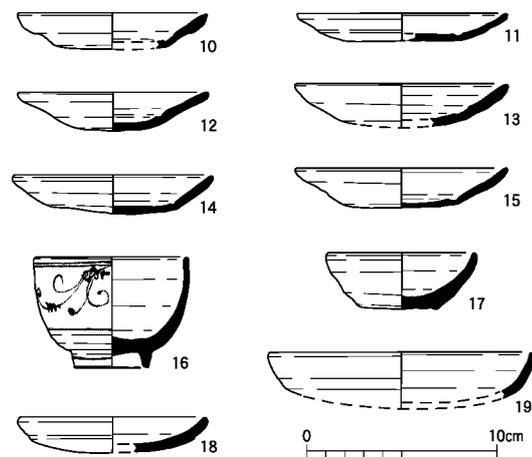


図15 流路1出土土器実測図(1:4)

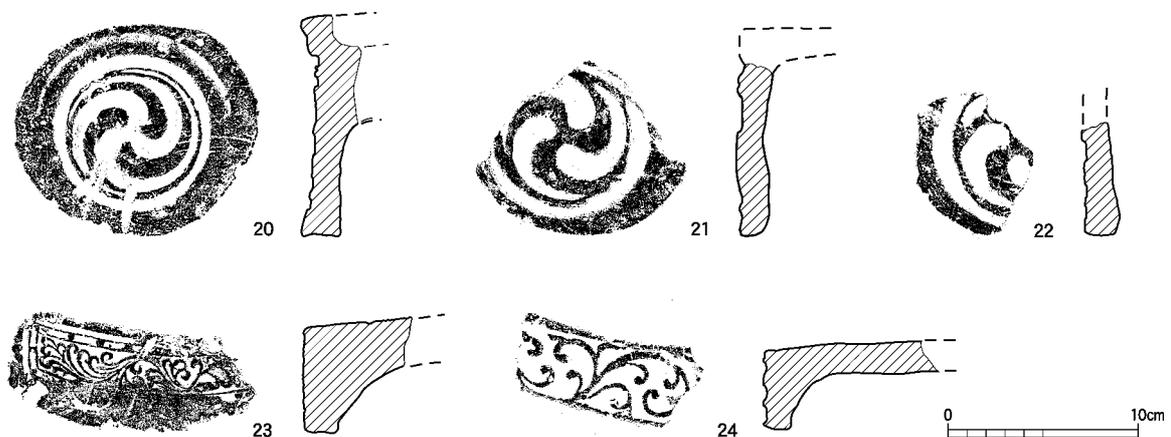


図16 軒瓦拓影・実測図(1:4)

表5 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	須恵器	17箱		16箱	0箱
平安時代中期 ～鎌倉時代前期	土師器・軒丸瓦・軒平瓦		土師器11点、軒丸瓦3点、 軒平瓦2点		
室町時代	土師器・瓦質土器・施釉陶器				
江戸時代	土師器・瓦質土器・磁器・ 施釉陶器・焼締陶器・瓦	1箱	土師器6点、染付1点、 唐津1点	0箱	1箱
計		18箱	24点（1箱）	16箱	1箱

器は図15の10・11である。10は端部が尖り、体部、底部は薄くなっている。11は、端部が丸みを持ち、全体的にやや厚みをもつ。これらは、17世紀の前半代の様相を示すが、その他の出土遺物の様相からすると流路1上層は17世紀中葉前後に収まるようだ。土師器のほか、瓦質の羽釜や焙烙、施釉陶器には唐津椀、鉄釉瓶、青緑釉段皿、天目椀などがある。また、焼締陶器には、丹波・信楽擂鉢、染付には徳利、花卉皿などもある。

(2) 瓦類

軒丸瓦は平安時代中期のものではなく、平安時代後期の巴文のものが2個出土している。図16の20・22は、流路2からの出土である。21も含めて栗栖野産と思われる。

軒平瓦の内、23は遺構検出中に出土した。平安時代中期のもので、瓦当部は半分折り曲げたようにして形成している。仁和寺周辺に近似のものが出土している。24は、流路1中層から出土した。平安時代後期に属するもので、完全折り曲げのものである。京都産と思われる。調査地の南方に位置していたとされる神宮寺に関連する遺物の可能性もある。

4. 小 結

流路1は調査地をほぼ東西に、しかも直線的に流れていることがわかり、この溝が人工的に造成されたものであることがはっきりした。他の遺構との切り合い関係や出土遺物からすると、流路1は平安時代末期から鎌倉時代に造られ、江戸時代前後から埋まったと推定できる。そして、江戸時代のある時期、北側の現在の位置に付け替えられたことになる。すなわち、『下賀茂境内之絵図（寛文古図）』と平安時代末から鎌倉時代初期の作といわれている『鴨社古図』に記載されている奈良の小川の位置は異なる。したがって、寛文年間（1661～1672）までには流路は現小川に移設されたことになる。

石組遺構の性格については、方向が西へ振っているとはいえ、現参道の下に位置していることから当初旧参道を想定した。しかし、神社から神事に伴う仮設の施設との御教示を得た。元禄15

年（1702）の御蔭神事（御生神事）の古図があり、仮設の施設である^{あくのや}幄屋の様子が描かれており、それと符合する。石組遺構の築造年代については、江戸時代前期に収まる流路1の中層が石組遺構を切っていること、また石組遺構検出中に採取された遺物は数少ないが平安時代後期のもののみであることから、石組遺構は流路1が設けられた時期以降で、流路1中層が形成されるまでの時期に築造された。

石組遺構付近の流路1の両肩を挟んで杭跡と考えられる遺構がある。流路1にかかる橋が想定でき、既述した古図のように流路があり、それをまたいで南北の仮設の施設があり、それを結ぶ橋が描かれていることと合う。ただし、流路1は17世紀中葉前後にはほぼ埋まっていたと思われるが、なお流路に沿って泥湿地状の窪地状が残り橋がまだ架けられていたとしたら、元禄15年の古図（描かれている川が奈良の小川の東西部分とすれば）の位置に相当する。既に完全な平坦地になっていたとすれば、付け替えられた新しい流路での神事の模様を表した古図となる。

石組遺構や旧参道直下に検出された集石遺構の他に祭祀を窺わせる遺構がある。平安時代後期の流路2、焼土壙2・67出土の土師器を中心とする遺物群は、埋土状態が破碎して投棄したような状態や、炭などが混入していること、さらにはいずれも流路の肩口方向から投棄していることから、何らかの祭祀に伴うことを窺わせる。

註

- 1) 『史跡賀茂御祖神社境内（糺の森）発掘調査報告』 宗教法人賀茂御祖神社 1992年

奈良の小川 2 次調査

1 . 調査経過

調査地は、賀茂御祖神社境内・糺の森の一画に位置する。糺の森整備委員会による奈良の小川・平安期流路整備計画によって、奈良の小川の復元工事が実施されることになった。この工事に伴う事前の発掘調査を、2000・2001年度の2回にわけて実施した。

奈良の小川の旧流路の所在については、1991年度に京都府・京都市文化財保護課が実施した試掘調査の際に確認されており、この結果に基づき調査区を設定し発掘調査を行った。

2001年度は、参道より東側で泉川までを調査対象とし、調査面積は239.85㎡であった。

調査の結果、奈良の小川を約32mにわたって検出し、その両岸で祭祀遺構を数ヶ所で確認した。

調査期間中に、糺の森整備委員会に対して中間報告（2002年2月25日）を行い、現地説明会（2002年2月26日）を実施した。また今回の調査で、旧奈良の小川の堆積層は完全に消滅することになるため、小川の断面を一部剥ぎ取り保存した。

2002年3月4日に奈良の小川の発掘調査は完了し、復元工事に移行した。

2 . 遺 構

今回の調査区の大部分は、1991年度に試掘調査が実施されており、その部分の確認調査がほとんどであった。

基本層序は、現代盛土（約30cm）の下が遺構面となり、その下は、小川の堆積層となる。

小川 規模は幅約2.5～3.0m、深さは平均で約40cm、トレンチ中央部分の盛り上がったところで約70～80cmであった。小川底部の高低差は2～3cmとほとんど認められず、東から西に向かって緩やかに流れていたと考えられる。

小川の埋土は大きく3層に分けられるが、堆積土には腐植土が一切検出できなかった。埋土の



図17 調査前全景



図18 小川断面剥ぎ取り作業風景

最下層からは平安時代後期の遺物が、最上層からは桃山時代の遺物が出土していることから、小川は桃山時代後期頃以降には埋まっていたと考えられる。

今回の調査でも護岸施設は確認できず、この小川が素掘りのままであったことがわかった。

泉川 調査区東端で、泉川と小川が接する部分を確認した。この部分が、旧泉川の西肩であったと考えられる。泉川の堆積土は、3時期確認できた。

最西端に位置する南北方向の肩は、泉川の氾濫によるものと考えられ小川の北肩を切って南北に流れている。この流れの底部からは、平安時代後期の遺物が出土した。

小川・泉川両方の川底から平安時代後期の遺物が出土したことから、この2本の川が同時期に成立していたことが確認できた。平安時代後期以降2本の川の分岐点周辺は、徐々に埋まっていくが、その様子を

拡張区の北壁断面で確認することができた。この時期の川底からは、鎌倉・室町時代の遺物が出土する。また拡張区の南壁断面からは、小川が埋まった後の泉川の堆積を確認できた。この流れの底部からは、江戸時代頃の遺物が出土している。

今回の調査において、泉川が徐々に東に移行していく様子が確認できた。

同時期の2本の川の底部には、約20cmの高低差が認められ、水を取り入れる小川の底部の方が泉川の底部より高くなっていた。

石敷遺構 約20cm前後の川原石を敷き詰めたもので小川の南側で検出した。北側にも同様の川原石を確認したが、今回は掘り下げなかった。

断面観察の結果、幅約70cm、長さ約1m前後の掘形の中に人工的に川原石を入れたものが、一つの単位となることが確認できた。しかし、川原石は丁寧には並んでいなかった。

この石敷の規模は、東西幅約5m、

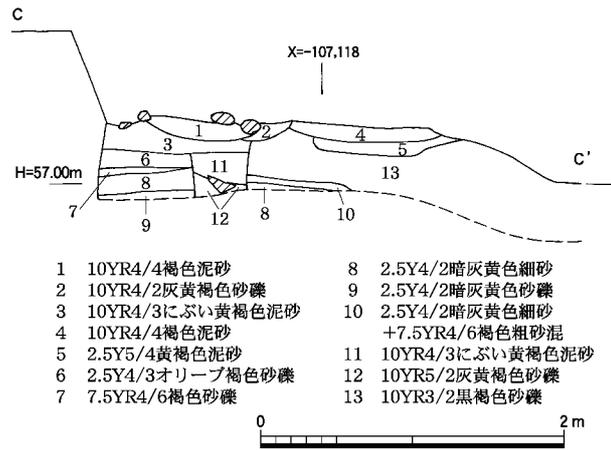


図19 石敷遺構東側断ち割り断面図(1:50)

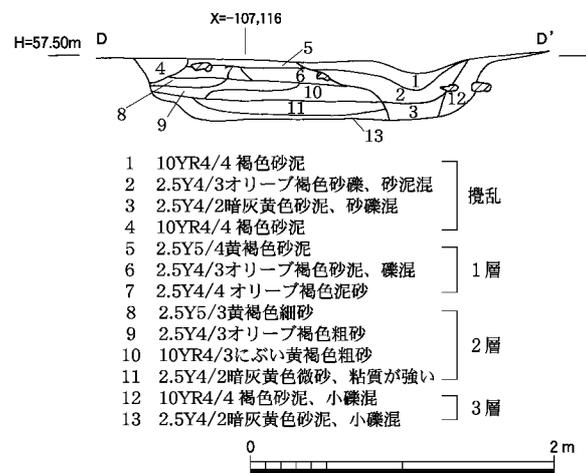


図20 小川断面図(1:50)

表6 遺構概要表

時期	遺構
平安時代後期	小川、泉川、石敷遺構
鎌倉時代～桃山時代	小川、泉川
江戸時代	泉川、土壌
時期不明	集石遺構

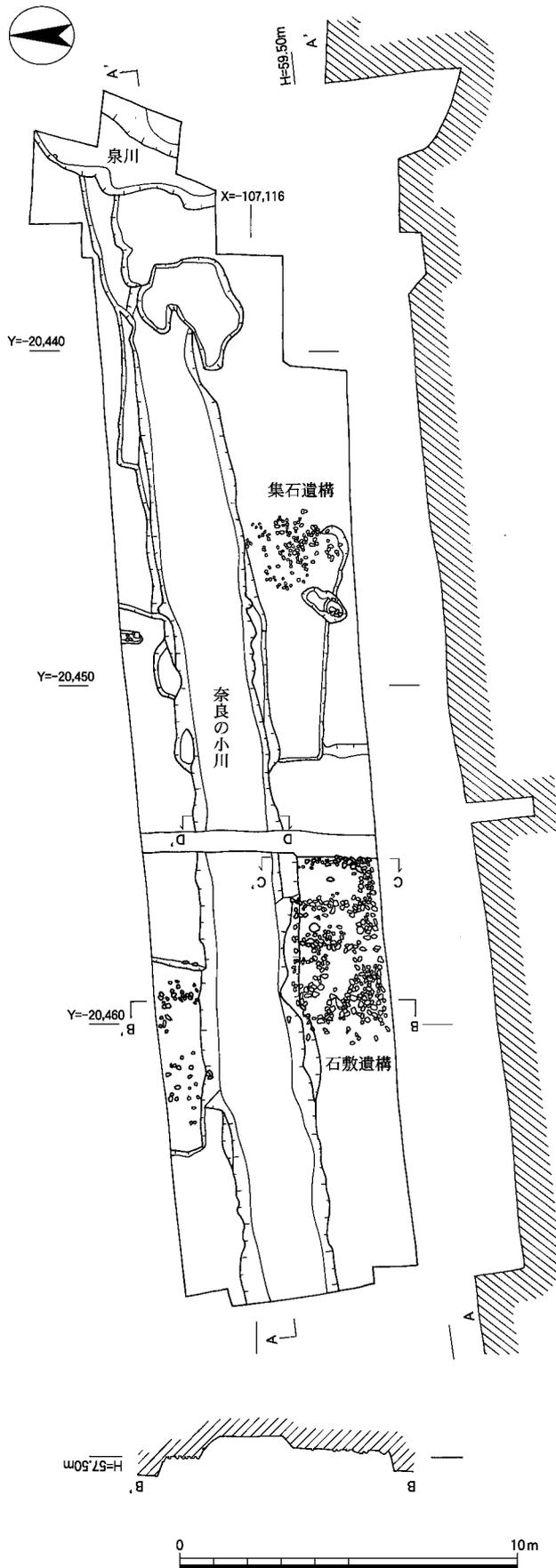


図21 遺構実測図 (1 : 200)

南北の大きさは確認できなかったが、1991年度の試掘調査では、南に約2.8m分検出している。

石敷遺構の時期は、これを覆っていた層から平安時代後期の軒丸瓦や土師器などが出土していることから、平安時代後期以前には成立していたと考えられる。

集石遺構 小川の南側で検出した。拳大の石や約20cm前後の石を敷いたものであるが、樹木根によって攪乱されており遺構の原形を留めていない。しかし、断ち割り断面の観察により、底部に拳大より少し小さめの石を敷き詰め、その上にやや大きめの石を積んでいることが確認できたことから、人工的に造られたものであることは確実である。

時期については、出土遺物が樹木の抜き取りの際に混入したと思われる江戸時代のものしかなく、詳細は不明である。

3. 遺物

出土遺物は、整理箱にして7箱であった。遺物は盛土層から2箱分、残りは小川の堆積層および石敷遺構・集石遺構周辺などから出土した。

小川の堆積層からは、縄文時代から近世までの遺物が出土した。

(1) 土器類

土師器杯(1) 口径11.6cm、器高2.0cm、石敷遺構出土。口縁に2段ナデを施す。

土師器杯(2) 口径11.8cm、器高2.1cm、小川第1層出土。12世紀末から13世

紀初め頃の遺物である。

天目茶椀（3） 口径11.0cm、器高6.8cm、小川第2層出土。
1580年前後に、瀬戸・美濃地方で焼かれたものである。この
小川が、埋められた時期の遺物と考えられる。

土師器耳皿（4） 口径5.4cm・8.7cm、器高2.8cm、小川第
2層出土。小川埋没年と同時期と考えられる遺物である。

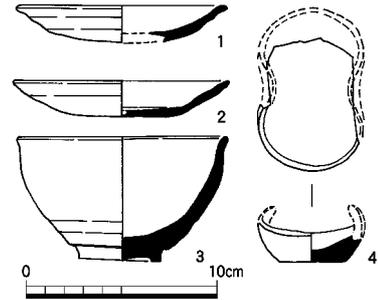


図22 土器実測図（1：4）

（2）瓦 類

巴文軒丸瓦（5） 小川の南岸で石敷を覆っていた層から出土した。右巻きの巴文で、頭は離れ
ている。尾は細長く伸び、内外区を分ける界線に接する。丸瓦凸面には、縦方向のヘラナデを施
している。胎土は、砂粒を少し含み灰褐色を呈する。焼成は良好で、硬質である。

巴文軒丸瓦（6） 小川の北岸で、石敷を覆っていた層から出土した。右巻きの巴文で、頭は離
れている。尾は細長く伸び、内外区を分ける界線に接している。瓦当面は楕円形を呈し、焼成は
良好である。胎土は、砂粒を少量含み黄褐色を呈する。瓦当裏面に、指オサエの痕跡が認められ
る。

巴文軒丸瓦（7） 石敷遺構
から出土した。尾は細長く伸び、
界線に接している。胎土は灰黄
褐色を呈し焼成は良好である。

宝相華文軒平瓦（8） 集石
遺構から出土した。半截した宝
相華を同じ場所で天地に配して
いる。瓦当范の打ち込みが浅く、
文様はつぶれている。平瓦凹面
に薄く布目が残る。凸面には指
圧痕が認められ、ヨコナデを施
している。瓦当范の痕跡が顕著

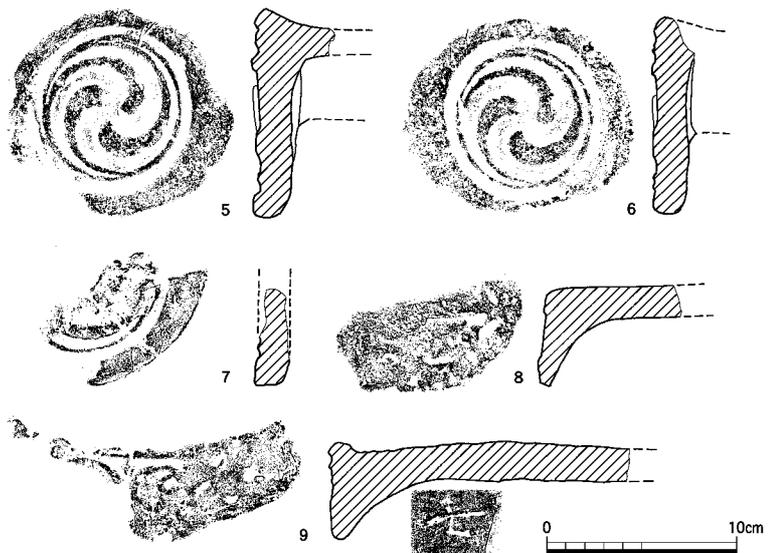


図23 軒瓦拓影・実測図（1：4）

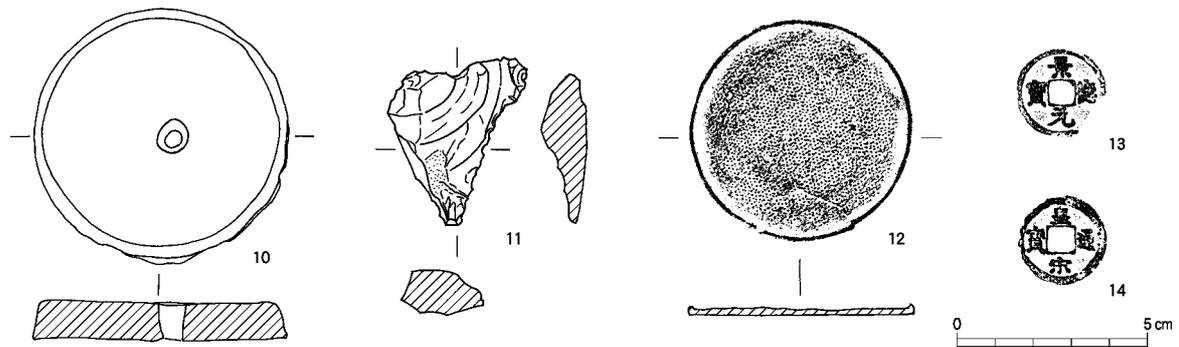


図24 その他の遺物実測図（1：2）

表7 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石製品	3箱	石錐1点	2箱	0箱
平安時代後期	土師器・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・銭貨		土師器2点、軒丸瓦3点、軒平瓦2点、銭貨4点		
鎌倉時代～室町時代	土師器・瓦				
桃山時代～江戸時代	土師器・施釉陶器・焼締陶器・瓦・土製品・金属製品	4箱	土師器1点、天目茶碗1点、鏡1点、紡錘車形土製品1点	4箱	0箱
計		7箱	16点(1箱)	6箱	0箱

である。瓦当成型は、半折曲げである。

唐草文軒平瓦(9) 石敷遺構から出土した。范の打ち込みが浅く、文様は不鮮明である。平瓦凹面に布目痕が認められる。瓦当面にも一部布目を残す。平瓦凸面に「七」のヘラ記号があり、瓦当范の痕跡が顕著である。縦方向のナデを施す。曲線顎で、指圧痕がある。瓦当成型は、半折曲げである。

軒瓦はすべて、平安時代後期のものである。

(3) その他の遺物

紡錘車形土製品(10) 現代埋土出土。江戸時代のものと考えられるやや大きめの紡錘車形の土製品である。大きさは直径約6.2cm、厚さは約1cmで、中央に直径約1cmの穴を穿つ。

石錐(11) 現代埋土出土。縄文時代の石錐で、材質はチャートである。大きさは、長さ約4cm、幅約3cm、厚さは1cmで、磨滅が少ない。

鏡(12) 現代埋土出土。江戸時代中期頃(17世紀)のものである。「砂目地」文様を施す。大きさは、直径約6cmで、厚さは約0.1cmと非常に薄い。外縁は0.2cmである。

銭貨(13~16) 小川埋土からの出土である。13は景德元寶(北宋1004年)、14は皇宗通寶(北宋1004年)。

4. 小 結

今回の調査で、泉川から瀬見の小川までの全長約66mの調査を終了した。

今回の調査でも、護岸施設を持たない素掘りの人工の小川であることが確認できた。東西の高低差はほとんどなく、東から西に向かって水は緩やかに流れていた。

小川の成立時期は、小川底部からの出土遺物や周辺の石敷遺構からの出土遺物などから、平安時代後期以前と考えられる。

泉川からの取水口部分には、特別の施設は検出できなかったが、川底の高低差によって取水量

の調節を行っていたと考えられる。

小川の周辺が周囲より少し高くなっていることや、本殿を望む小川の南岸で祭祀遺構と考えられる石敷遺構や集石遺構を検出した。このうち石敷遺構は、小川の岸に設けられた禁足地（人の踏み込むことのできない神聖な場所）の可能性が考えられる。また鏡や銭、鈴などの祭祀に関係すると思われる出土遺物などからも、この辺りで平安時代頃から江戸時代にかけて、たびたび祭祀が執り行われていたと考えられる。

小川埋土の残存部分が、試掘調査の残りのみという状況から、出土遺物は非常に少なかった。しかし、遺物は平安時代後期から江戸時代頃までのものを含む。小川の埋土を3層に分けて検出したが、1層と2層の時期差はほとんどなく、この小川が自然に埋まったものではなく、一気に埋められたものであることが、遺物の出土状況から窺うことができる。

以上のことから、奈良の小川は泉川から瀬見の小川を結ぶ祭祀のために造られた人口の小川であり、使用されていた期間はよく管理された清流であったことが確認できた。しかし、江戸時代になって「祭祀の場」としての役目を終えて埋められ、流れは現在のものに替えられた。これらの状況は、賀茂御祖神社に残る『鴨社古図』・『下賀茂境内之絵図』に見える奈良の小川の変遷の様子によく合致していると言える。

参考文献

- 上田 篤・上田正昭編『鎮守の森は甦る』社叢学事始 思文閣出版 2001年
三宅和朗『古代の神社と祭り』吉川弘文館 2001年

ま と め

今回の調査で全容を明らかにした奈良の小川やその周辺は、平安時代から江戸時代に至る間、祭祀の場としてよく管理されてきたことがわかった。

祭祀遺構としては、平安時代後期の祭祀の場と考えられる石敷遺構・集石遺構や、御蔭神事の際の幄屋の一部と考えられる石組遺構などを確認することができた。

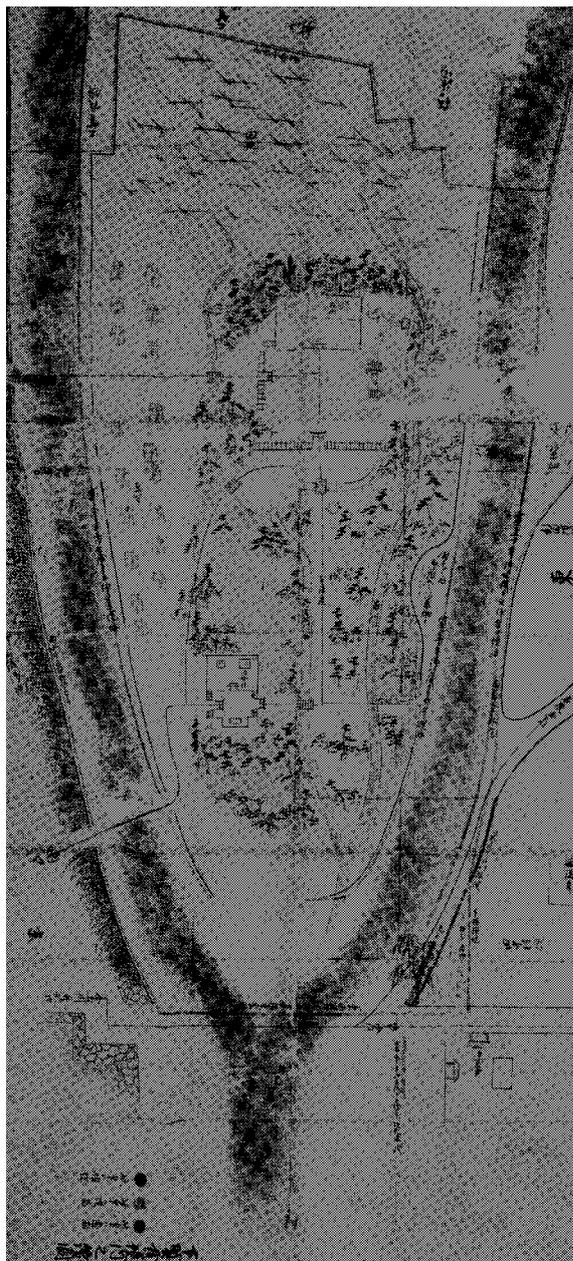


図25 下賀茂境内之絵図（寛文古図）
賀茂御祖神社蔵

これらの遺構が所在する賀茂御祖神社は、「神坐ます森」である糺の森に鎮座している。古代よりカモ氏の氏神様として祀られてきたが平安遷都とともに、一地方豪族の氏神様から国家の鎮守神として朝廷によって祀られることになった。それによって賀茂御祖神社では、国家祭祀（官祭）と従来からの氏神信仰という2つ（公・私）の性格の違う祭祀が執り行われるようになった。

古代から糺の森で幾度となく執り行われてきた氏神に祈願する古代の祭祀において、水は物事を清浄にし浄化する力をもつ神秘的なものとされ、川の流れや湧き水の有るところに面して祭祀を執り行った。その際には、禁足地などを設けて、人の踏み込めない神聖な場所を小川の側に作り出していたと考えられる。

賀茂御祖神社境内の試掘調査で、たびたび検出された集石遺構の幾つかは、この禁足地である可能性が考えられる。

賀茂御祖神社において、平成14年（2002）5月26日に「社叢学会」が発足した。「糺の森顕彰会」とともに、今後益々糺の森の研究が進められ、賀茂御祖神社の歴史が確認されていくことを期待したい。

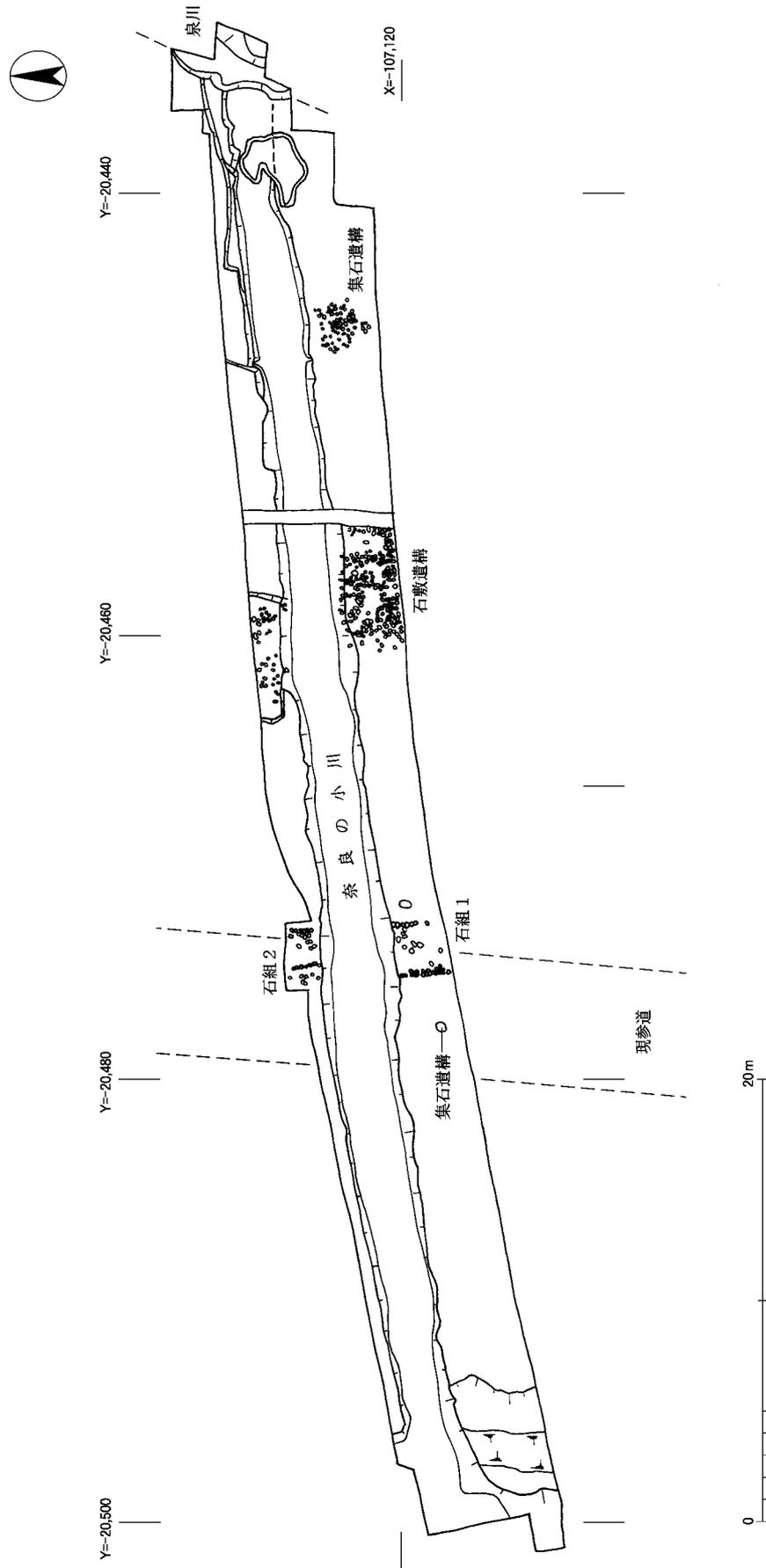


図26 奈良の小川調査区全体図(1:300)

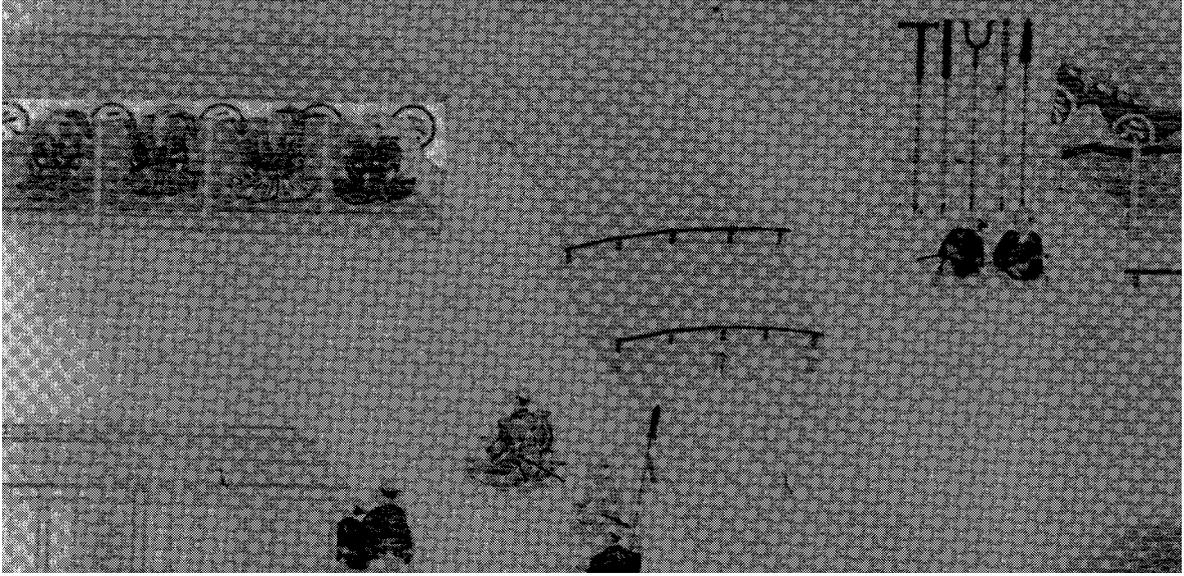


图27 御蔭祭行列絵巻 賀茂御祖神社蔵



图28 御生神事行粧絵巻 賀茂御祖神社蔵

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせきかもみおやじんじゃけいだい							
書 名	史跡賀茂御祖神社境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-12							
編著者名	櫻井みどり・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきかもみおや 史跡賀茂御祖 じんじゃけいだい 神社境内	きょうとしさきょうく 京都市左京区 しもがもいずみかわちょう 下鴨泉川町59	26100	309	35度 59分 56秒	135度 59分 59秒	斎宮御所 1998年11月 24日～1998 年12月16日	67m ²	斎院御所 再建
						奈良の小川 1次調査 2001年1月 22日～2001 年3月12日	237m ²	糺ノ森の 整備
						奈良の小川 2次調査 2002年1月 21日～2002 年3月4日	239.85m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
史跡賀茂御祖 神社境内	史跡	縄文時代		石錐				
		平安時代 ～鎌倉時代前期	土壇状遺構・流路・焼 土壇・杭跡遺構・小川 ・泉川・石敷遺構	土器・軒瓦				
		鎌倉時代 ～桃山時代	石敷・石列・集石遺構 ・流路・小川・泉川	土器・瓦類・銭貨				
		江戸時代	流路・土壇・柵列・泉 川	土器・陶磁器・瓦類・ 土製品・銭貨・鉄製品 ・鏡				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-12

史跡賀茂御祖神社境内

発行日 2003年2月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961